

今そこにあるオープンアクセス Clear and present Open Access

第 3 回 グリーンだからといって雑誌をキャンセルしてもいいか？

Is it OK to cancel a journal because it is green?

栗山 正光

首都大学東京学術情報基盤センター

9 月 16 日、[GOAL メーリングリスト](#) で激しい論争が巻き起こった。きっかけとなったのは、ユタ大学図書館のリック・アンダーソン（本稿執筆時の情報では、10 月末来日し、図書館総合展のフォーラムに参加予定）が投げかけた「エンバーゴなしのグリーン OA を許可している雑誌のリストを簡単に入手できないか？予算がないのでキャンセル対象にしたい」という[投稿](#)である。

もちろん、グリーンだからと言ってその雑誌の論文がすべて OA になっているとは限らない。すぐにこの点を指摘されて、アンダーソンは「十分な割合のコンテンツが無料で入手できると判断されれば」と条件を修正している。

これに対して、今そんなことを公言すれば、グリーンだった出版社がセルフアーカイブを禁止したり、長期のエンバーゴを設定したりするようになってしまう、と猛反発したのが、例によって、スティーヴン・ハーナッドである。セルフアーカイブされている論文がまだまだ少ない現時点でのキャンセルは時期尚早で、OA の発展を阻害するというわけである。彼は自分のメッセージに「[図書館コミュニティは OA の敵か味方か？](#)」という刺激的なタイトルをつけて強い反対を表明する（その前に、図書館予算の問題は OA には関係ないから図書館のメーリングリストでやってくれ、それは検閲だ、検閲？個人の意見を述べただけだ、などといういささか大人げないやり取りもあった）。

図書館関係者からは、OA で入手可能な割合を確認する作業の煩雑さや、多くの雑誌がビッグディールに含まれていて単独でキャンセルできないことを指摘する声も上がった。

翌 17 日、電子ジャーナルの契約等を主な議題とする [LIBLICENSE](#) というメーリングリストで、モデレーターのアン・オーカーソンが「挑発的なやり取り ([A provocative exchange](#))」としてこれらの議論を紹介した。以後、議論の場は LIBLICENSE に移ることとなる。

ここでは、グリーンでない雑誌こそキャンセル対象にすべきだとか、研究者は著者原稿では満足しないとか、いやその大学にとって周辺的で著者原稿でも構わないものをキャンセル対象とするのだとか、そもそもグリーン OA は間違った戦略だとか、さまざまな主張が展開された。しかし、議論は次第に水掛け論の様相を呈してくる。

10 月 9 日、オーカーソンはリック・アンダーソンの[最後のメッセージ](#)への注記で議論の終結を宣言する。彼女はこれまでのやり取りを総括した後、「さらなる現実的な証拠が出てきたら改めてこの問題を取り上げましょう」と締めくくっている。

（追伸）私事で恐縮ですが、10 月 1 日から所属が首都大学東京に変わりました。今後ともどうぞよろしく願いいたします。もう一つ、奇しくも同日、本連載のタイトルとして拝借した『今そこにある危機』の原作者、トム・克蘭シー氏が逝去されました。謹んでご冥福をお祈りします。